大丸有 SDGs ACT5

アクションレポート 2022

CONTENTS

ご挨拶 …… 02

概要 …… 03

今年度サマリー …… 04

ACT5アクション事例

ACT1 サステナブルフード …… 06

ACT2 環境 …… 08

ACT3 WELL-BEING …… 10

ACT4 ダイバーシティ&インクルージョン …… 12

ACT5 コミュニケーション …… 14

ACT5メンバーポイントアプリ …… 16

メディア掲載一覧 …… 20

有識者からのコメント …… 21

参加者からの声 …… 22

総括と次年度に向けて …… 24

アクション一覧／写真 …… 25

ご挨拶

大丸有SDGs ACT5　実行委員長

中島 篤

三菱地所株式会社
代表執行役 執行役専務

コロナ禍を経て、戻りつつあるリアルを感じながら、「今だからこそ気づき、考え、行動できること。」2030年のSDGs達成に向けて、パートナーシップでアクションを続けます

2020年にスタートした大丸有SDGs ACT5の活動も今年度で3年目を迎えました。

国内外において各種行動制限が緩和される等、世の中が徐々にポストコロナへと動き出し、大丸有エリアもようやくかつての賑わいを取り戻しつつあります。ACT5の各活動についても、オンラインからリアル開催に切り替えられるものが増え、結果として、今年度は昨年度を上回る多くの方に様々な取り組みに参加いただくことができました。活動に協力いただけるパートナーも年々増える中、エリア内の多くの店舗にはアプリポイントの配布拠点という形でのご協力をいただき、このACT5という取り組み自体がまちに定着し始めてきたように感じています。

次年度以降も、大丸有エリアを起点に各個人、団体、企業のパートナーシップで課題解決へのアクションを起こしていくこの活動を、一層促進していきたいと思っています。

持続可能な社会を目指して解決すべき課題は非常に多く、世界に目を向けると、政治経済の見通しが不透明さを増す中で、生命や人権、安全で公正な社会の重要性が改めて強く意識されています。また、昨年末のCOP15開催を受けて生物多様性の回復にも大きな注目が集まっています。国内においても、LGBTQをはじめとした多様性を包摂する社会への関心はかつてないほど高まっていますし、都市の貧困、教育格差等、様々な社会課題が改めて認識されるようになっています。

目標年度である2030年まで残り7年となり、SDGs達成への取り組みをますます加速していくことが求められています。一人ひとりが行動を変えることで社会の仕組みが変わり、それが地球規模の大きな目標達成にも繋がっていくと信じて、ACT5の活動を広げていきたいと考えています。

大丸有SDGs ACT5　副委員長

梅田 泰弘

農林中央金庫 常務執行役員

地域と都市が互いに支え合い、パートナーシップで社会課題を解決していく

コロナの影響が冷めやらぬ中、ロシア・ウクライナ危機が発生し、多くの不安があった年でありました。

また、“食”に目を向けると、飼料価格の高騰等、日本国内の食糧生産基盤について改めて考えさせられる局面でもあったと感じています。

安定的な食料確保といった社会課題を含め、世の中のあらゆる社会課題は一社の取り組みで到底解決できるものではなく、より一層パートナーシップの力で解決を目指すことが、求められていると考えています。

私たちはこの大丸有SDGs ACT5を、社会課題を解決していくパートナーシップの“プラットフォーム”と捉え、引き続き、多様な業種のパートナー企業と連携しながら、2030年のSDGs達成に向けた多様なアクションを展開してまいります。

大丸有SDGs ACT5の3年目の活動は、withコロナが定着しつつある中、実際に会場で行うリアルイベントや現場に赴く体験イベントの実施も行ってまいりました。

今年度の取り組みでは、昨年度に引き続き食のサステナビリティを考えるイベント「SUSTABLE」の企画・開催に加え、日本の貴重な資源である森林の課題に目を向けた企画、海の環境保全やブルーカーボンの現地見学企画、また、地域のSDGsの取り組みの発信として沖縄を題材とした軽食付き企画の実施等、多岐に渡るイベントを開催することができました。

農林中央金庫としても、農林水産業の各分野で社会課題の解決に向け、熱い思いをもって行動されている生産者の取り組みの発信、地域のサステナビリティを目指す取り組みの発信を通じて、引き続き、“食や地域”を切り口にSDGに関心を持ち、行動する人々を増やし、社会全体の課題解決に繋げていきたいと考えています。

実行委員会

役職等は2023年2月時点

実行委員長

中島 篤
三菱地所株式会社 代表執行役 執行役専務

副委員長

梅田 泰弘
農林中央金庫 常務執行役員

平田 喜裕
株式会社日本経済新聞社 専務取締役

委員(順不同)

村木 美貴
千葉大学大学院 工学研究院 教授

爲井 清文
農林中央金庫 食農法人営業本部 営業第二部長

酒井 耕一
株式会社日経BP 日経ESG 発行人

菊川 嘉彦
丸の内熱供給株式会社 専務執行役員

狩野 洋平
大手町・丸の内・有楽町地区まちづくり協議会
都市機能部会長

堀 健一
株式会社三菱総合研究所 全社連携事業推進本部
地域イノベーション本部長

竹内 和也
大丸有環境共生型まちづくり推進協会 専務理事

服部 謙一
三菱地所株式会社 エリアマネジメント企画部長

大谷 典之
大丸有エリアマネジメント協会 事務局長

歌川 貴
株式会社東京国際フォーラム 取締役（事業推進担当）

監事

樽林康治
三菱地所株式会社 サステナビリティ推進部長

大丸有 SDGs ACT5

概要

大丸有SDGs ACT5実行委員会

三菱地所
農林中央金庫 NORINCHUKIN
NIKKEI
日経BP
大手町・丸の内・有楽町地区 まちづくり協議会
Ligare 大丸有エリアマネジメント協会 OMY Area Management Association
ECOZZERIA
街と歩む、街を支える。 丸の内熱供給株式会社
MRI 三菱総合研究所
TOKYO INTERNATIONAL FORUM 東京国際フォーラム

大丸有SDGs ACT5 とは

東京駅前、大手町・丸の内・有楽町地区（以下、「大丸有エリア」）を起点として、大丸有エリア内外の企業・団体が連携し、SDGs達成に向けた活動を推進するプロジェクトとして、2020年に始動しました。

総合デベロッパーである三菱地所、地域の一次生産者を支える金融機関である農林中央金庫、日本を代表する経済メディアである日本経済新聞社ら複数の企業、団体が実行委員会を組成し、お互いの持つ様々なリソースを持ち寄り、具体的なアクションの創出を目指しています。

特徴

1 コミュニティの形成

大丸有エリアに拠点を置く企業が、個社の枠を超えて協業し、大丸有エリアを起点とした社会課題解決型のコミュニティが形成されている。

2 リソースの繋がり

各社の持つリソースが有機的に繋がることで、個社ではなしえない幅広いテーマに対して探求・PJ化が進んでいる。

3 アプリの活用

アプリを活動全般の基盤とすることで、来街者・就業者の行動変容を促進。取得したデータの分析を通じた1、2の加速度的成長を目指す。

注力テーマ

5つのテーマを設定

- サステナブルフード
- 環境
- WELL-BEING
- ダイバーシティ＆インクルージョン
- コミュニケーション

SDGsに含まれる広範なテーマの中から、実行委員会企業内で注力する重要テーマを設定。

沿革

大丸有エリアは約4,300の事業所に約28万人が就業する日本を代表するビジネス街であるが、オフィス機能に加えて商業、文化、宿泊等、多様な機能と賑わいが溢れるこの街を、ビジネス以外の目的で訪れる人も年々増えている。

大丸有SDGs ACT5は、このエリアに集まる多様な資源をオープンリソース型で掛け合わせ、人と人、知と知の結合によって社会課題の解決を目指す、「まちづくり×SDGs」というこれまでにない取り組みであり、2020年から、三菱地所、農林中央金庫、日本経済新聞社を中心に複数の企業・団体で組成した実行委員会が主体となってこれを推進している。

初年度は実行委員会企業に加えて45社が参加、35個のアクションを創出、2期目は68社との連携、54個のアクション創出へと更に拡大した。3期目となる今年度は昨年度に引き続き国連広報センターからの後援を受け、更に様々なステークホルダーや多くの地域との連携を図り、新たなアクションの創出や、活動内容の深化を目指して活動した。

今年度サマリー

定量データ

協力企業数

詳細 28ページ

84社

昨年度 68社（昨年度比 ＋16社）

延アクション数

63回

昨年度 54回（昨年度比 ＋9回）

延アクション参加者数

16,168人

3か年累計 約35,000人

アプリユーザー数

登録者数
※アプリをダウンロードし、
利用者登録まで完了した人

2,521人

昨年度 2,217人（昨年度比 ＋304人）

ポイント付与店舗・拠点数

78拠点

昨年度 42拠点（昨年度比 ＋36拠点）

ポイント利用（交換・寄付）

2,123,308ポイント

昨年度 1,164,087ポイント
（昨年度比 ＋959,221ポイント）

※寄付総額 **632,358円**

寄付先：クラダシ基金、Learning for All、フローレンス、
エコ結び基金、国連UNHCR協会、世界自然保護基金ジャパン、
宮古島海の環境ネットワーク
（丸の内ポイントへの交換を除き、1ポイント1円に相当）

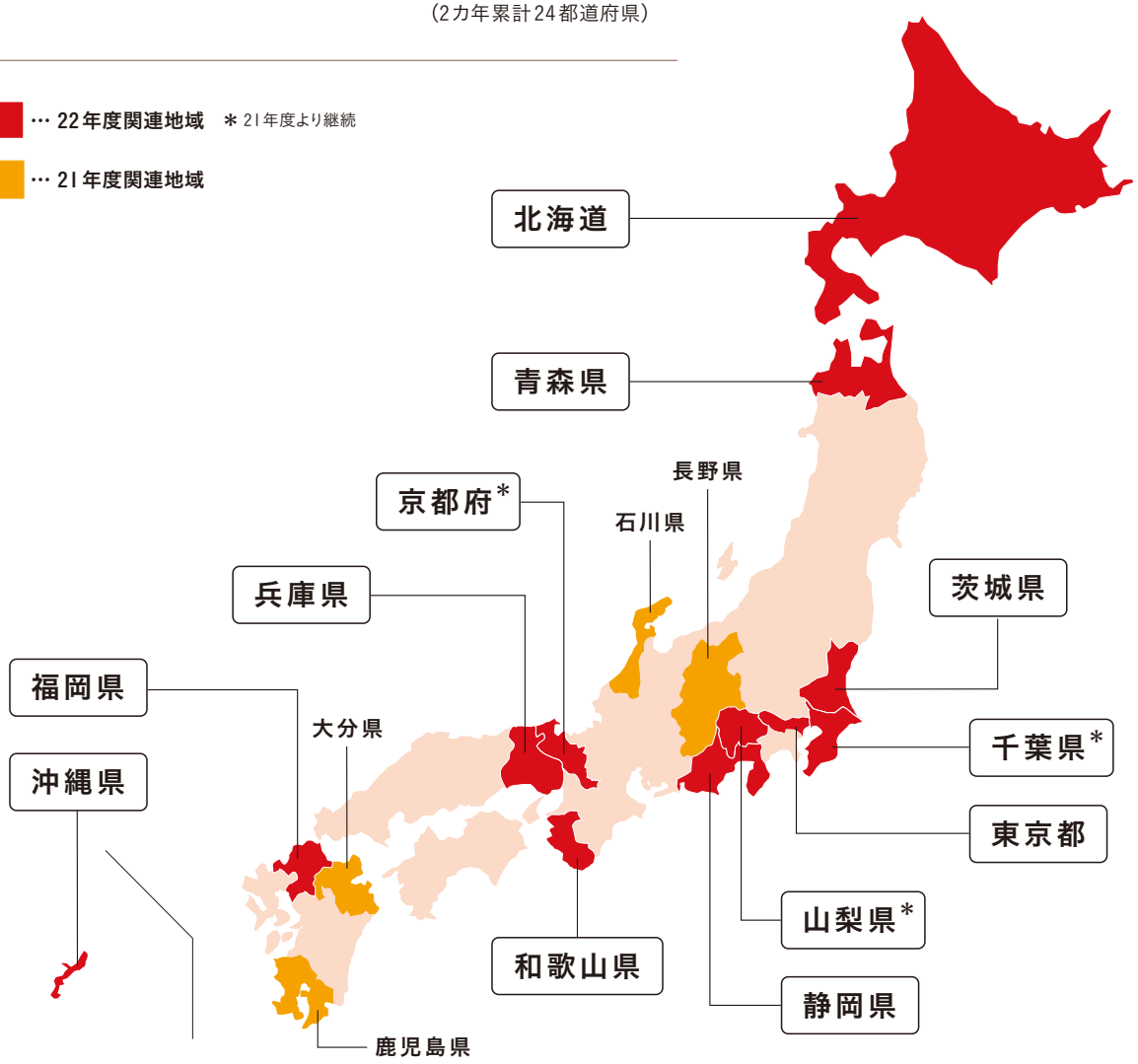
関連地域

12都道府県

（2カ年累計24都道府県）

… 22年度関連地域 ＊21年度より継続

… 21年度関連地域



今年度サマリー

ピックアップトピックス

PICK UP 1 ACT5メンバーポイントアプリの拡充

SDGs達成に向け個人の行動変容を促進し、大丸有エリアを起点としたSDGsアクションの好循環を生み出すために、今年度もACT5メンバーポイントアプリを展開しました。アプリ実装2年目となる今年度は、三菱総合研究所とともに、主に以下の機能の拡充を試みました。

詳細 16ページ

ポイント付与拠点数の大幅増加

大丸有エリア店舗でのエコバッグ・マイボトル持参や、ACT5イベント参加など、SDGs達成につながる個人のアクションを通じてポイントを獲得できるACT5メンバーポイントアプリ。今年度はポイント獲得拠点の拡充を図り、昨年度比36件増加となる、78件の店舗・拠点にご協力頂きました。

詳細 19ページ

チャリティウォーキングの開催

アプリの歩数カウント機能で、1日8000歩超を達成すると本人にポイントが貯まると同時に、同ポイント分をSDGsの活動に取り組む団体へ寄付する取り組みを実施。個人の健康増進と社会貢献を結びつけることができる企画となりました。

詳細 11ページ

PICK UP 2 レインボージャックイベントを開催

6月のPRIDE月間にちなみ、LGBTQについて楽しみながら「知る」イベントとして、オリジナルのレインボーフラッグによる街の装飾、分かりやすく解説したパネル展示、期間限定「丸の内二丁目BAR」、トークイベント等を開催。延べ700名を超える方々にご参加いただき、「多様性とは何か」を知っていただく機会となりました。

詳細 12ページ

PICK UP 3 プロギングイベントを開催

ジョギングをしながら、ごみ拾いを行う北欧発のSDGsスポーツ：プロギング。エリアワーカーを中心に参加者を募り、集まってプロギングを行うイベントを実施。累計で150名の方にご参加頂き、60kg以上のごみを回収。私たちのWELL-BEINGを実現しながら、街の美化に貢献しました。

詳細 10ページ

PICK UP 4 映画祭を開催

多くの人に親しみのある映画を切り口として、様々な社会課題に触れながら、その渦中にいる人たちのリアルな「顔」、「声」、「想い」に触れてもらう場を提供することを目的に今年も約3週間の期間に渡って計10回(内トークショー付9回)開催し、約700名の皆さまにご参加頂きました。

詳細 15ページ

アクション事例

ACT 1 サステナブルフード

未来を変えるひとくち
SUSTABLE
サステーブル

アクション 1-2

食従事者と消費者をつなぐ「SUSTABLE（サステーブル）2022～未来を変えるひとくち～」

「作り手」、「使い手」そして「食べ手」が集い、未来の食を考える

「SUSTABLE（サステ―ブル）」は、持続可能性に配慮された食材（サステナブルフード）の普及を目指して2021年度にスタートしたプロジェクト。参加者が食にまつわる社会課題やその解決策を知り、その先のアクションを生み出すことを目的としています。

今年度もTOKYO TORCH常盤橋タワーMY Shokudo Hall&Kitchenを会場とし、食の「作り手」である生産者やメーカー、「使い手」であるシェフ、そして「食べ手」である消費者が一つの会場に集い、サステナブルフードの美味しさを共有しながら課題について考えられる場として、試食付きセミナーの形式で開催。全6回ともに会場チケットは開催前に売り切れとなる盛況ぶりでした。

多種多様なテーマ設定

2022年度全6回のテーマは「古来種野菜の世界」、「海を再生する海上養殖」、「未来を支える陸上養殖」、「アグロフォレストリー」、「サステナブルな日本ワイン」、そして「未利用魚の有効活用」。海の課題から陸の課題まで、また、自然との共生を考える回もあれば、今後の食料危機への解決策として、テクノロジーを用いた陸上養殖の可能性について学ぶ回もあり、多種多様な観点から未来の食について考えました。

いずれの回も、熱い思いをもってサステナブルフードの生産に取り組む登壇者と、食の美味しさだけでなく社会課題解決への取り組みも行う有名シェフの対談を展開。登壇者からは、「Eating is Voting」という言葉や、「社会的付加価値の高い食材を選ぶことで社会が変わる」、「50年後も残していきたい食材を選んでいくことが必要」というメッセージなど、私たちの消費行動が社会を変え、未来を変えることができると学びました。

また、「消費」の現場と「生産」の現場の両方を知るシェフが提供する一皿は参加者の五感を刺激し、「今日の一皿を頂いて、『食』に関する自分の概念がアップデートされた」、「これからはその食べ物が持つ背景も知った上で何を食べるのかを選んでいきたい」など、前向きな感想を多数いただきました。

SUSTABLEは今年度もオンライン生配信を行い、大丸有エリアから全国に「未来を変えるひとくち」を提案しました。

アクション事例

ACT 1 サステナブルフード

アクション 1-4

食べて応援SDGs！“秋の国産ジビエフェア”を開催しました

ジビエを通じてSDGsを考える

丸ビル・新丸ビル・国際ビルなど大丸有エリアのレストラン20店舗で、「食べて応援SDGs！“秋の国産ジビエフェア”」を開催。国産ジビエブランド推進コンソーシアムと連携し、11月の期間限定でジビエメニューを展開しました。ジビエは地方農山村被害防止の観点だけではなく、環境負荷の高い畜産の縮小や、新たなタンパク源として食料危機の解決策につながる可能性があり、SDGsを考える上で重要な役割を果たします。フェア中にジビエメニューを注文するとACT5メンバーポイントを獲得できる仕組みも設け、ジビエを通じてSDGsを身近に感じるきっかけを提供しました。

また、連動企画として、日本ジビエ振興協会代表理事の藤木氏による大丸有レストランのシェフへのジビエ講習会や、三菱地所カフェテリアでのジビエフェアも開催しました。

(C)2023Patagonia, Inc.

アクション 1-3

大丸有エリアの店舗で販売される「サステナブルフード」とACT5公式アプリの連動

サステナブルフード購入でポイント獲得

2022年度の新たな取り組みとして、大丸有エリアで販売されるサステナブルフード（持続可能性に配慮された食材）を購入すると、ACT5メンバーポイントを獲得できる仕組みを構築しました。

今年度は、紫野和久傳が環境保全の取り組みのひとつとして手掛ける「和久傳米」や、自然環境を修復しながら生産する「パタゴニア プロビジョンズ」製品、環境負荷の高い動物性の食材を使用せずに作られたラ・メゾン・デュ・ショコラの「ガナッシュ ビーガン」、そして、エシレ・メゾン デュブールがひび割れ等により販売できないサブレを有効利用した「サブレ・ア・タルティネ」を対象としました。

アクション事例 2 環境

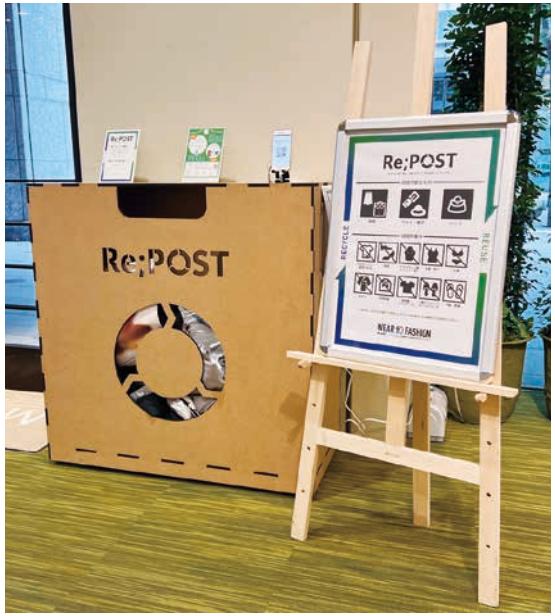
アクション 2-21 2-22 2-26など

大丸有SDGs ACT5への協力店舗が大幅に増加し、アプリポイントの付与がより身近に

3年目を迎えた今年の成果の一つに、大丸有SDGs ACT5の趣旨に賛同、協力下さるエリアの店舗が大幅に増えたことが挙げられます。

大丸有エリア店舗でのエコバッグ・マイボトル持参や、ACT5イベント参加など、SDGs達成につながる個人のアクションを通じてポイントを獲得できるACT5メンバーポイントアプリ。今年度はポイント獲得の拡充を図り、昨年度比36件増加となる、78件の店舗・拠点にご協力頂きました。

これによって、来街者やエリアで働く方々にとってアプリポイントの付与がより身近な存在になり、人々の行動や経済活動を通じたSDGs貢献がより数字で見える化させることが出来ました。



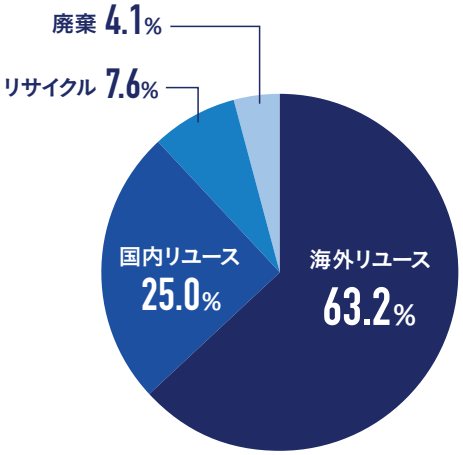
アクション 2-25

ecommitと連携した衣類の回収企画「Re;POST」

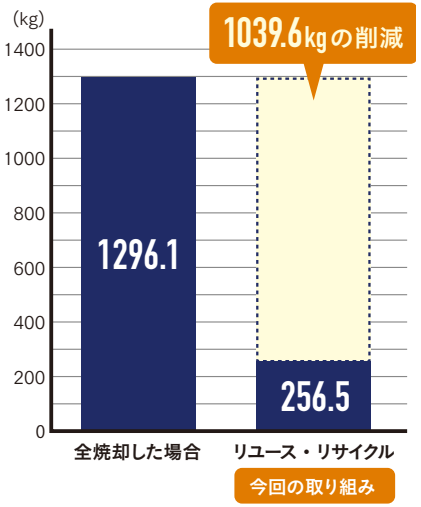
エリアの来街者、就業者の方々から、家庭で不要になった衣類をエリアの13か所にポスト型のBOXを設置して回収。延べ約2,500名から提供された衣類の総重量は約1,350kgとなりました。

焼却処分を最小限に留め、更には、素材としてのリサイクルよりもリユース活用を優先することで、環境負荷の低い資源循環の仕組みとなっています。回収した衣類は、約88%を国内外でリユース活用し、焼却処分に対して約1,000キロのCO2排出を削減することが出来ました。

● 衣類選別比率



● 二酸化炭素排出量



アクション事例 ACT 2 環境

アクション 2-24

サーキュラーシティ丸の内　ゴミ＝資源　循環のデザイン

公益財団法人日本デザイン振興会が運営するギャラリースペースGOOD DESIGN Marunouchiで開催された、大丸有エリアを舞台にした循環型社会への取り組みをデザインとアートを通じて紹介する企画展にアート協賛。

丸の内の廃棄物循環を見える化し、誰かにとってのゴミは誰かにとっての資源。そんなことを考えるきっかけになる企画展となりました。

アクション 2-32

沖縄×サーキュラーエコノミーについて考えよう

2022年は、沖縄返還50周年の節目の年でした。

これに因んで、大丸有SDGs ACT5でも、JAおきなわとオリオンビールの方を登壇者に迎え、沖縄のサーキュラーエコノミーをテーマに軽食付きのセミナーを開催。

地方の魅力とSDGsを大丸有エリアで体感する、そんな機会を大丸有SDGs ACT5では今後も設けたいと考えています。

アクション 2-1

皇居外苑濠での泥と生きもの採取 ～濠プロジェクト

三菱地所は、環境省、日本自然保護協会等と皇居外苑の自然資源保全に関し、連携しています。皇居のお濠の貴重な水草に着目した取り組みである「濠プロジェクト」では、かつてお濠に生息し、現在は消失してしまった水草の系統保全と、泥に種子が眠っている可能性のある水草の復元に挑戦しています。今回、これまで同社の取り組みであったものを、エリアの取り組みとして活動を拡充すべく、ACT5に組み入れ、皇居外苑と大丸有エリアの生物多様性について学び、考える機会としてエリアで働く方にも参加頂き、実際にお濠に入り、泥と生きものを採取し、観察するイベントを開催しました。

アクション 2-31

新技術で社会課題解決の道へ突き進む！“バイオ素材の開発、普及”に挑む起業家に学ぶ！

新たなバイオ技術を切り口に社会課題の解決を目指す二人の経営者、お米に代表される国産バイオマス資源を活用したプラスチック樹脂原料を製造するバイオマスレジンホールディングス 代表取締役CEO 神谷雄仁氏と、バイオプロセスリファイナリー技術を活用した、グリーン化学品の開発を行うGreen Earth Institute 代表取締役CEO 伊原智人氏にご登壇頂きました。それぞれ挑んでいる課題は異なっていても、何がきっかけで、どんな使命感を持ち、そしてどんな未来を描いてるのかを講演頂きました。

そこから、私たち個人の気づきと学びに、そして、今からできることへのアクションに繋げる機会となりました。

Biomass Resin HOLDINGS

Green Earth Institute

アクション事例

ACT 3 WELL-BEING

アクション 3-2

北欧生まれのSDGsスポーツ：プロギングイベントを、6回実施

昨年度に続き、ジョギングしながら、街に落ちているごみを拾う新しいスポーツ：プロギングのイベントを5月から11月（8月を除く）の毎月実施しました。今年のトピックは以下の3点が挙げられます。

1つ目は、近隣エリアに拠点を持つ企業との連携を企画したこと。大丸有エリアに近接する千代田区麹町にオフィスを構えるカール・ツァイスの社員の皆様に、同社オフィスから丸の内まで、一般参加者の方々と共にプロギングに参加いただきました。

2つ目は、平日夕方に開催したこと。これにより、大丸有エリアで働く方が参加しやすくなり、エリアの方にとって、より身近なアクションになりました。

3つ目は、三菱地所プロパティマネジメントが企画するエリアを訪れる方々へのおもてなしの取り組み「丸の内アンバサダー」と連携したこと。

これらにより、今年、大丸有SDGs ACT5が目論んでいた、取り組みの広がりと深まりを実現することが出来ました。

尚、毎回約25名の方に参加頂き、毎回10kgを超えるごみを収集。参加者のWELL-BEINGの実現と街の美化に繋がる機会となりました。

アクション 3-17

Minecraftカップ2022全国大会「生き物と人と自然がつながる家・まち」応援企画

子どもたちが生物多様性を学び、見て、考えて、Minecraftで表現するワークショップ

世界の教育現場で活用されている教育版Minecraftを使用し、子どもたちのプログラミング教育やデジタルなものづくりに触れる機会の創出を目指して開催されている「Minecraftカップ全国大会」。その応援企画として、今年の作品テーマである“生物多様性”について学び、大丸有に見られる自然や施設を見学した後にMinecraftで表現するワークショップを開催しました。

子どもたちがMinecraft制作に取り組む間、保護者には元・文部科学省副大臣の鈴木寛氏の講演並びにMinecraft制作の実績により大学入学を果たした大学生の体験談を聞く会も開催しました。

アクション事例

ACT 3 WELL-BEING

アクション 3-5

大丸有ワーカー出演パフォーマンス『今ここから、あなたのことが見える／見えない』

大丸有エリアで働くワーカーは今、何を思い、生きるのか?

公募により選ばれた13人の大丸有ワーカーと、演出の倉田翠氏との徹底的なコミュニケーションによって生まれた作品。自己を表現することでの出演者のWELL-BEING向上と、観覧者が作品を見ることで自己を顧みる可能性を探る舞台となりました。

アクション 3-6

たくさん歩いて寄付にもつながる! 目指せ優勝!チャリティウォーキングチャレンジ

健脚を競いながら、参加者の健康増進と寄付促進を実現

ACT5メンバーポイントアプリの歩数カウント機能を活用し、1日8000歩超を達成すると獲得できるポイント数と同ポイント分をSDGs活動に取り組む団体へ寄付する取り組み「チャリティウォーキング」。この仕組みを利用した2週間限定ウォーキングコンテストが開催され、358名が健脚を競いました。1日平均が8000歩を超えた方が208名に達し、寄付促進に寄与。チャリティウォーキングの寄付先7団体に寄付を行いました。

MY PINK ACTION
知ろう、自分と乳がんのこと。

アクション 3-7

<オンラインセミナー>MY PINK ACTION 知ろう、自分と乳がんのこと。

乳がんを正しく知り、自分に合った適切なアクションを起こすための基礎知識を伝授

早期発見で9割以上の方に治癒が期待できるにもかかわらず、検診の受診率が50%に満たない乳がん。このセミナーでは、乳がんを正しく知り自分に合った適切なアクションを起こすための基礎知識を専門医から解説いただいたとともに、乳がんになっても自分らしく生きることの大切さを乳がん経験者から伺いました。女性のみならず男性からも「家族を大切にするきっかけとなった」と好評を博したセミナーとなりました。

アクション 3-8

【大丸有×伊豆下田】地域の社会課題をともに考えるワークショップ

都市と地方をつなぐブリッジ人材と提携し、地域課題の解決と都市のニーズを満たしながら双方のWELL-BEINGを向上させる

地域が抱える社会課題を探査し、都市ワーカーにできることを考えるため、伊豆下田でフィールドワークを実施。現地視察に加え、下田市で活躍するビジネスパーソンや東伊豆町行政と座談会を行い、地域課題解決と都市ワーカーのニーズを満たす協業のあり方を議論しました。この活動の中で、新しい働き方がWELL-BEINGに結びついていく可能性も探求しています。

アクション事例 ACT4 ダイバーシティ＆インクルージョン

アクション 4-1

レインボージャックイベント～“あえてここから”、レインボーカラーが6色の理由を知ることからはじめよう～

LGBTQの権利啓発の活動が行われる6月のPRIDE月間にちなみ、オリジナルのレインボーフラッグによる街の装飾と、LGBTQについて楽しみながら“丸の内”で「知る」イベントを開催。LGBTQについて分かりやすく解説したパネル展示や、期間限定「丸の内二丁目BAR」、DJイベント等を実施。トークセッションでは、セクシュアリティも生き方も多様なゲストから、過去から現在に至るまでの心境や体験をお話しいただき、みんなで「多様性とは何か」を楽しく知り、考えました。当日は、当事者を含む多くの方に参加いただき、トーク後のゲストを含む交流会「カタリバ」では、話しが尽きない程、熱気溢れる交流が行われました。

POINT

- 「丸の内二丁目BAR」では、昨年のE&Jラボ修了生が店頭に立ち、来店者にリーフレットの配布やAllyについての説明を行う企画も行った。

アクション 4-2

丸の内 Shall Weコンサート ～共生社会の実現に向けた一歩を音楽から～

障がいの有無に拘らず、感動を糧とする子ども達の心の成長を願いながら、共に音楽を楽しむ

都心への外出体験や生の音楽に触れる機会が少ない特別支援学校の生徒の皆さんを、本格的音楽ホールである東京国際フォーラムにご招待。トリトン・アーツ・ネットワーク企画、金管アンサンブルTANBRASSにより、親しみある曲の演奏やパフォーマンスが繰り広げられ、障がいの有無を超えて音楽や楽器の面白さを一緒に学び、感動を共有しました。この外出体験や音楽鑑賞が子ども達の成長の糧となるとともに、社会の共生意識がより高まっていくことを目指しています。

写真提供：認定NPO法人トリトン・アーツ・ネットワーク

アクション 4-3

キラキラっとアートコンクール マルキューブ審査会 ＆ 農福連携マルシェ

作品を楽しみながら子どもたちを応援
農福連携の事例紹介とマルシェも同時開催

障がいのある子どもたちの可能性を応援したい、との想いから三菱地所が2002年にスタートした絵画コンクール。一連の審査の一部として、丸の内の就業者・来街者による審査会をACT5のD&Iの一環と位置付けて開催しました。1次審査を通過した150作品が丸ビル・マルキューブに並び、約300名の方に絵を鑑賞しながら審査に参加いただきました。「農業×福祉」に取り組む農園の紹介と農産物や加工品の販売会も同時開催しました。

アクション事例

ACT 4 ダイバーシティ＆インクルージョン

アクション 4-5

【E&Jラボ】D&Iを楽しく学ぶコミュニティ「〇〇さん、あえてここから聞かせて！」

「E&Jラボ」は、D&Iの取り組みを、一歩先に進めて、誰もが楽しみながら未来の多様性について考えるAllyコミュニティです。2021年度に引き続き、本年度第二期では、「〇〇さん、あえてここから聞かせて！」をテーマに、多様な当事者ゲスト等から、今更ちょっと聞きづらいけれど本当は知っておきたいD&Iについてお話を伺い、参加者と一緒に交流しています。初回は、アートや音楽、映像、舞台等を通じて、誰も排除しない、誰もが自分らしく生きられる“まぜこぜの社会”を目指して活動されている、俳優の東ちづるさんがご登壇。リアル会場、オンライン会場共に参加者同士も活発に意見交換が行われ、一体感のあるイベントとなりました。

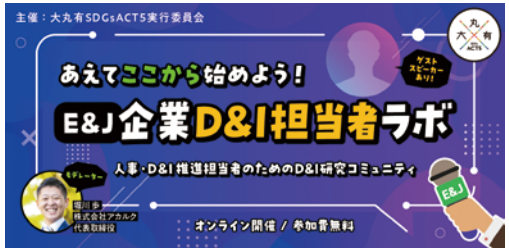
POINT

- E&Jは、それぞれアルファベットのDとIの次の文字であり、「D&Iの次へ、取り組みを一歩進める」「これからは誰もがEnjoy＆JoinでD&Iを推進する」という思いを込めて名づけられました。

アクション 4-6

【E&J】人事・D&I推進担当者のための D&I研究コミュニティ「あえてここから始めよう！」

人事・D&I推進担当者のためのD&I研究コミュニティも新たにスタートしました。「何から取り組めば良いか分からない」といった企業担当者が、社内のD&Iを進めるための情報を収集し、気軽に相談ができる場を提供します。大丸有エリアを中心とした企業担当者が多数参加し、先進的取り組みを行う企業のゲストからの事例紹介と共に、企業担当者同士の交流の機会として大変反響をいただきました。



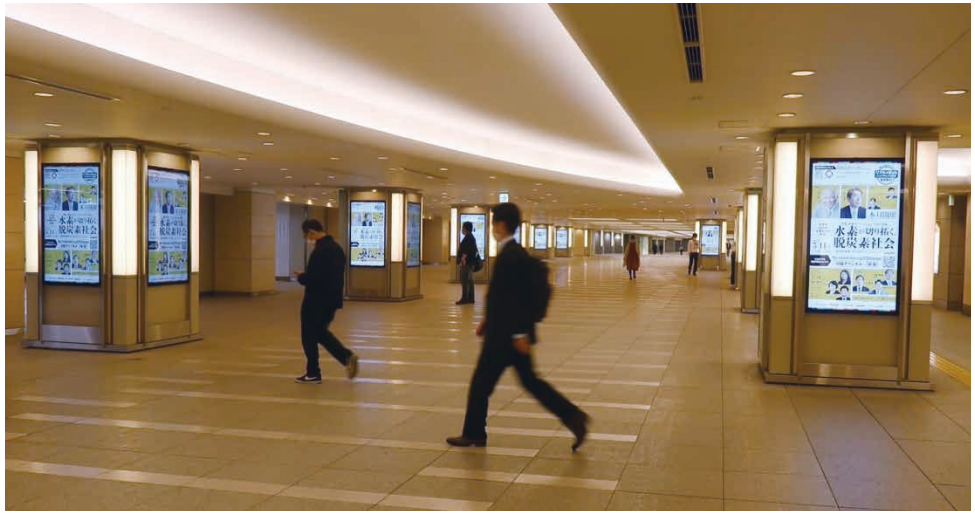
アクション 4-4

大丸有のD&Iをかんがえるカイギ

D&Iにおける、「知る」「共感」「巻き込む」をテーマにしたイベントを2部構成で開催。第1部の調査分析編では、2021年度「大丸有エリアのD&Iの推進状況における調査結果」の解説から始まり、企業で働く障がいのある当事者、先進的企業の人事担当者から社内の取り組み状況をお話しいただきました。第2部の意見交流編では、多様な視点から楽しくD&Iの取り組みを行っているゲストを迎え、どのようにD&Iを発信し、人を巻き込んでいるのか、それぞれの活動事例を交え、D&Iの一歩先の進め方や仲間づくりのヒント等についお話しいただきました。ゲストを囲んだ交流会においても会話が弾み、D&Iの輪が広がる機会となりました。

アクション事例

ACT 5 コミュニケーション



日経 NIKKEI SDGs FESTIVAL OTEMACHI MARUNOUCHI YURAKUCHO

私たちは持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。

アクション

「日経大丸有SDGsフェス」ハイブリッド開催しました

一般消費者の関心が高いテーマにも広げ、4万人が参加

開催3年目となる「日経SDGsフェス大丸有2022」はハイブリッドで開催しました。過去最高となる、257人もの講演者をお迎えし、5月と9月の12日間にわたり20のイベントを日経ホールと丸ビルホールで実施すると同時に日経チャンネルで配信しました。全体の参加者、視聴者数は4万人にのぼりました。

新型コロナの感染者数も減少する中、5月GW期間中や9月に人の動きが活発になることを想定し、初めて大丸有の共用施設、商業施設のサイネージを使ったプロモーションを展開し、集客を図りました。また、日本経済新聞紙面や各イベント会場で「ACT5メンバーポイントアプリ」のダウンロードや利用を促すなどの施策も行い、多くの方へ告知をすることができました。

コンテンツ面では、SDGsのすそ野の拡がりを捉え、5月は、「森林、木材の利活用」、「エシカル消費」、「スポーツ」、「大学教育」といった新たなテーマのイベントを開催しました。それぞれの分野の専門家が登壇し、持続可能な社会の在り方について具体的な議論が行われました。フェス全体を通じて、講師は著名な経済学者から高校生まで多様な顔ぶれが揃いました。海外からはノーベル経済学賞受賞者のロバート・シラー氏、元インド中銀総裁のラグラム・ラジャン氏、米コロンビア大学教授のジェフリー・サックス氏などが登壇し、国連事務次長の中満泉氏はウクライナの人道危機についてのスピーチを行いました。将来を担う世代の登壇者の招聘にも力を入れ、新しい事業を通じてSDGsの実現を目指す若手起業家や社会課題解決型のビジネスを考える高校生も参加しました。

9月は、「Z世代」や「グローバル」というテーマを打ち出しました。登壇者として国連とともにグローバルでSDGsを推進するハローキティを招聘し、現役高校生でもある俳優の鈴木福さんとの対談が実現しました。新しい事業を通じてSDGsの実現を目指す国内外の若手起業家も参加して、フィンランド、サウジアラビア、モーリタニアとオンラインでつなぎ、世界で活躍する若者の声をライブで発信しました。

今後も広い視野で国内外の事象やトレンドを迅速かつ確実に捉えながら、日経大丸有SDGsフェスの開催を通じてSDGs実現を推進していきます。

COMMENT

大丸有SDGs ACT5 副委員長

平田 喜裕

日本経済新聞社 専務取締役

開催3年目の2022年はコロナ感染の縮小により、少し人の動きが活発になったように思います。

日経SDGsフェスも、会場でのリアル聴講とライブ配信のハイブリッド開催を初めて実現し、大丸有施設でのサイネージ告知や「ACT5メンバーポイントアプリ」販促も始めました。

4年目となる2023年は街として人の流動を促し、弊社側のメディア力とコンテンツ力の連携をより一層加速し、“世界に類をみないSDGsの街”を目標として推し進めていきたいと思います。

アクション事例

ACT 5 コミュニケーション

アクション 5-3

3年目を迎え、初の屋外上映にも挑戦！「大丸有SDGs映画祭2022」を開催しました

「今知っておくべき世界のコト」を感じ、考えるきっかけを提供

多くの人に親しみのある映画を切り口に、様々な社会課題に触れながら、その渦中にいる人たちのリアルな一面に触れてもらう場を提供することを目的に、大丸有エリア内の様々な空間をミニシアターに仕立て、大丸有SDGs映画祭を実施しています。

今年度は昨今の世界情勢を受けて、「難民」をテーマにした2作品を上映。その一つであるオープニングイベントでは『ソニータ』上映後のトークショーに、UNHCR親善大使のMIYAVI氏と国連UNHCR協会報道ディレクターの長野智子氏をゲストに迎え、“世界の今”を考えました。

また、本映画祭では初めてとなるTOKYO TORCH Parkでの屋外上映会も実施し、秋の夜風を感じて頂きながら映画鑑賞する機会も創出しました。

本映画祭では昨年度までドキュメンタリー作品を中心に扱ってきましたが、今年度はより多くの皆さまに気軽に観に来て頂くことをテーマに、フィクション作品も4作品取り入れました。クロージングは東京国際フォーラムを会場に、アカデミー賞3部門受賞した話題作『コーダ あいのうた』を上映。上映後のトークショーでは、ろう当事者やご家族の実体験を知り、考える機会をお届けしました。

POINT

- 竣工1周年となるTOKYO TORCH Parkでは「1周年まつり」の一環として本映画祭が開催されました。

アクション 5-4

東京ビエンナーレ2023 はじまり展 第2弾「Slow Art Collective Tokyo」に協賛しました

オーストラリアで生まれたスローなアートが大手町にやってきた！大規模インスタレーション作品を市民参加型で共同制作

東京ビエンナーレは世界中から多様な作家やクリエイターが東京に集結し、まちに深く入り込み、地域の方々と一緒に作り上げていく国際芸術祭です。2023年の本開催を見据えたプレイベントとして大手町のオープンスペースを舞台に開催されました。廃材や竹などの自然素材を使った自由なアートを子供たちや就業者が参加型で共同制作しました。制作過程で様々なつながりを生まれ、コミュニティアートとしての可能性が垣間見えました。

Slow Art Collective（スローアートコレクティブ）とは、オーストラリア在住の加藤チャコとディラン・マルトレルが主宰する芸術グループです。持続可能性や多文化共生をテーマに、竹やロープなどの自然素材や、街で拾い集めた素材を用いた市民参加型のアートプロジェクトを行います。彼らの提唱する「スローアート」は、多様な人々が共にゆっくりと何かを創造することを通して、金銭とは別の価値や文化を共有・交換していく「つながりの装置」です。

ACT5メンバーポイントアプリ

進化を遂げた 2022年度のACT5メンバーポイントアプリ SDGs活動を通じたさらなる行動変容へ

「ACT5メンバーポイントアプリ」は、大丸有エリア内で行われるSDGs活動に対し、エリア独自の「ACT5メンバーポイント」を付与するツールです

昨年度も多くの方々に利用いただきましたが、2022年度はさらにパワーアップ。ポイント機能（獲得／利用）やメッセージ配信機能に加え、今年度は友達紹介機能や、一定歩数以上歩くとチャリティ活動を行う団体に自動的に寄付される、チャリティウォーキング機能を実装しました。より便利に楽しく、大丸有エリアのSDGs活動をより強力に推進していきます。また、たまったポイントがSDGsに寄与する特典との交換や寄付に利用されることで、さらにSDGs活動が広がるという好循環の仕組みづくりを目指しています。

SDGs活動の誘発と循環

SDGs活動参加により付与されたポイントの約80%がSDGsに関連する特典や寄付に交換されたり、丸の内ポイントとしてエリアの消費に貢献しています。

利用者数※	2,521名
SDGs活動の総実施件数	57,700件
ポイント付与された人	登録者の約61% 1,542名 総ポイント付与数 2,115,851ポイント
総ポイント利用件数	2,490件 総利用ポイント数 2,123,308ポイント ※チャリティウォーキング機能での寄付を含む

※ アプリをダウンロードし、利用者登録まで完了した人数

2022年度ACT5メンバーポイント実証成果

新規登録キャンペーン

キャンペーンをきっかけに、多くの方々に新規に参加いただき、活動のすそ野を広げることに成功しました。⇒ 2 3 4

今年度施策の効果

アプリへの新しい機能の実装や、新規登録・活動促進キャンペーン等の施策を実施し、利用者属性の変化や活動参加の機会拡大に寄与した可能性が示唆されました。⇒ 5 6 7

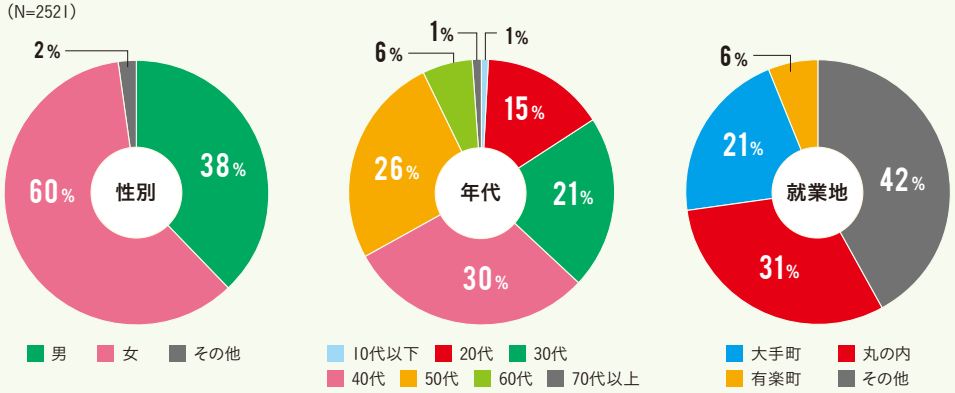
利用者からの声

多くの利用者から、SDGs活動への意識の高まりと、来年度も継続してアプリを活用したSDGs活動に参加したいという意向が示されました。⇒ 8 9 10

1 ACT5メンバーポイントアプリ登録者の属性や就業地

ACT5メンバーポイントアプリ登録者は女性が6割を占め、就業人口世代の20代～50代で約8割となっています。また、勤務地は大丸有エリア外の「その他」が半分弱を占め、残りの半分を丸の内と大手町が占めるという構図になっています。

(N=2521)

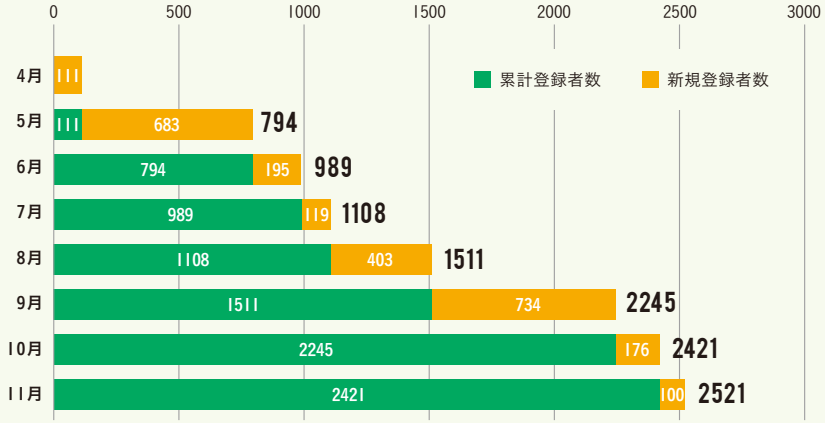


2 新規登録キャンペーンの実施と効果

2022年度は、アプリをダウンロードし利用者登録まで完了した利用者数として2,521名に参加いただきました。8月末より新規登録者向けに実施したキャンペーンの効果で、コア期間終盤にも関わらず9月には700名以上に新規に参加いただきました。

※コア期間：2022年5月9日～12月16日のポイント付与・利用期間

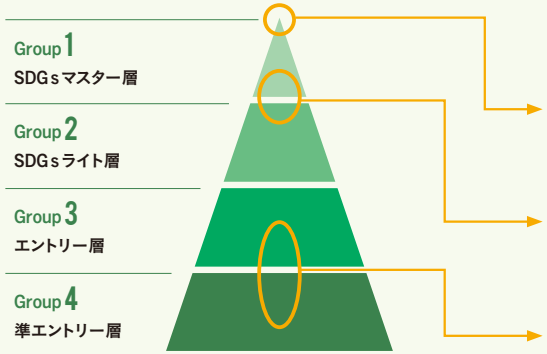
▼アプリ登録者数（N=2521）



ACT5メンバーポイントアプリ

3 様々な属性の利用者の発見とペルソナ化

今年度のACT5メンバーポイントアプリ利用者の中には、様々な利用者像が発見されました。Group1の最上位層には大丸有SDGs ACT5の活動に熱心に参加する「熱烈！SDGs女子」、Group1と2の間にかけて、情報感度が高く行動的な「しっかり者ポイ活マダム」が確認されました。またGroup3と4にまたがって、イベント等への参加はないが、実はしっかりとアプリを活用している「縁の下の力持ち寄付系男子」が確認されるなど、多様な属性の方に参加いただきました。



※アプリ利用者について、活動・イベントへの参加実績によりグループ分け

#	ペルソナ名	特徴・属性
1	熱烈！SDGs女子 ～大丸有SDGs ACT5のコア層～	ACT5メンバーポイントアプリに早期登録、ほぼすべてのACTに参加し、平均イベント参加回数は18回/人
2	しっかり者ポイ活マダム ～情報感度が高く、行動的な中年女性層～	大丸有勤務の中年女性、衣類回収等身近な活動をリピート傾向あり。ポイントの利用先は丸の内ポイントを選択。
3	縁の下の力持ち寄付系男子 ～潜在コア層～	中年男性、非大丸有勤務者でACT5の活動参加機会には恵まれないが、チャリティウォーキングは欠かさず実施。ポイント利用先も寄付を選択。

今年度施策の効果

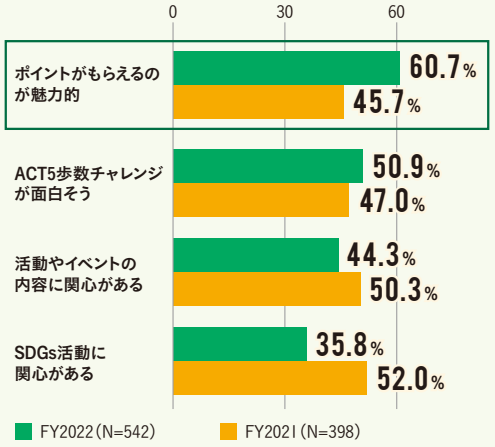
2022年度はアプリに新しい機能の実装や、アプリ関連のキャンペーン施策を実施し、利用者属性の変化や活動参加の機会拡大に寄与した可能性が示唆されました。

- **ポイント獲得への感度の高いユーザーの流入**
- **友人紹介機能の導入効果？女性比率が上昇（2021年度51.3%→2022年度60.1%）**
- **チャリティウォーキング機能（自動寄付機能）の実装と付与ポイント数の増加が、8000歩/日の達成回数増加を後押し？**

※ACT5大調査とは、全利用者を対象に2022/11/11～24に実施した大丸有SDGs ACT5全般に関するアンケート調査

4 ポイント獲得への感度が高いユーザーの流入を確認

▼ACT5メンバーポイントアプリ参加理由

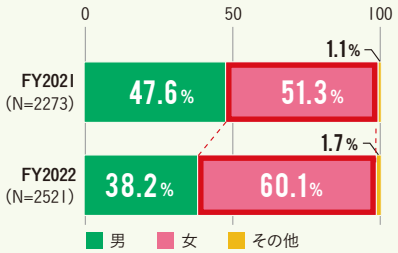


アプリへの満足度が高い項目にも変化が確認されました。特に今年度はポイント獲得への満足度が高さが顕著にみられました。

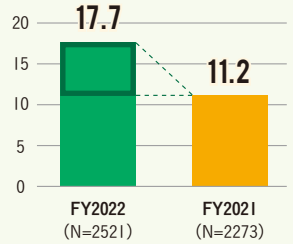
5 女性の方がコミュニティ形成しやすい？友人紹介機能が女性参加を後押し

友人紹介による新規登録者の69%を女性が占めるなど、今年度は女性比率の高まりが確認されました。
2022年度のACT5大調査からも、女性の方がポイント獲得への感度の高さが確認されており、4の調査結果との関連も伺えます。

▼登録者における女性比率の変化



▼チャリティウォーキング平均達成回数



6 チャリティウォーキング機能の進化で、8000歩達成回数に影響を与えた可能性

チャリティウォーキング機能の実装と、1日あたりの付与ポイント数の増加が、参加者あたりの8000歩/日の達成数を昨年比約160%に押し上げた可能性が示唆されました。

※2021年度は寄付機能なしの、ポイント獲得機能のみ

ACT5メンバーポイントアプリ

利用者からの声と、次年度以降のさらなる行動変容へ向けて

2022年度の活動を通して、利用者の皆様より様々な声をいただきました。いただいたご意見をもとに次年度以降のさらなる発展に生かしてまいります。

- **アプリを活用した取り組みにより、ユーザーのSDGsを意識した活動の機会が増えることを確認**
- **多くの参加者から、次年度以降のアプリを使った活動継続を希望する声が多数**

7 新規登録キャンペーン経由の登録者においても、一定数は幅広い活動へ参加

8/26～9/30の約1か月間に渡り新規登録キャンペーンを実施し、多くの方々にアプリに参加いただくきっかけになりました。特に、本キャンペーン経由の登録者がアクティブ層（SDGsマスター層とライト層の総称）のうち14%を占める結果となり、コア期間の終盤の実施にも関わらず、新規登録キャンペーンが活動全体の活性化に寄与したことが示唆されました。

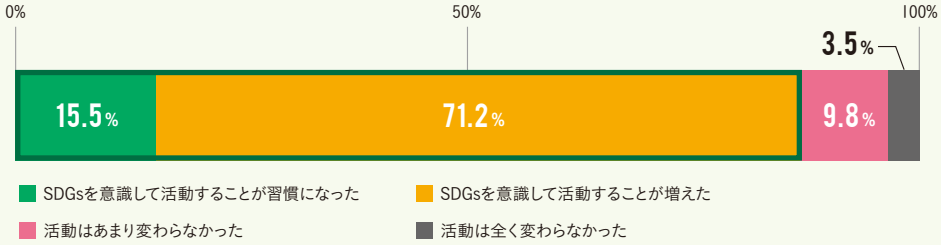
※新規登録キャンペーン:8/26～9/30にアプリ新規登録を行った利用者に、300pt進呈したキャンペーン

Group		利用者全体 (a)	キャンペーン経由 登録者（b）	割合 (b/a)
1	SDGsマスター層	294人	28人	10%
2	SDGsライト層	122人	30人	25%
Group 1+2	アクティブ層	416人	58人	14%

8 アプリを活用した取り組みによって、SDGsを意識した活動の機会が増えることを確認

ACT5大調査によれば、約87%の方が取り組みを通じて、SDGsを意識した活動の機会が増えたと回答しています。ここでもアプリを通じた意識の高まりと行動変容を確認することが出来ます。

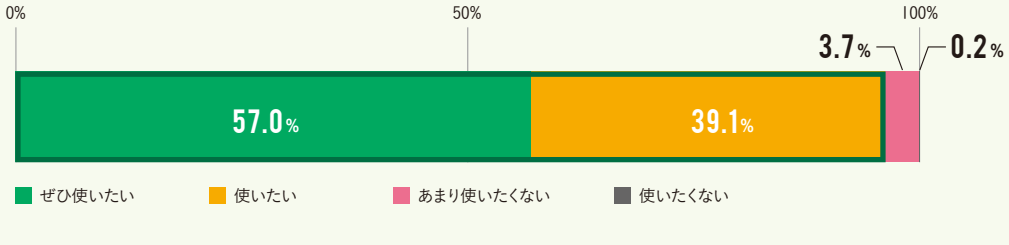
▼SDGs活動に対する意識変化 （N=542）



9 参加者からは次年度以降も活動継続を希望する声

ACT5大調査によれば、96%の方が今後もACT5メンバーポイントアプリ利用を希望しています。また、多くの協力店舗様からも、自社SDGs活動の認知向上や社員等への啓発効果を評価いただき、次年度の継続的な参加意向をいただいています。

▼今後のアプリ利用意向 （N=542）



10 寄せられたコメント

※2022年度ACT5大調査より抜粋、原文まま

- この活動を通して、このエリアへ足を運ぶことが多くあり、引き続き推進をお願いします。
- 大手町・有楽町・丸の内の、日本の主要な地域でこういう活動をやってくれることで、知るきっかけになるのでとてもありがたいです。
- リサイクルボックスを続けて欲しい
- 丸の内生活にまた新たなモチベーションができました
- 気持ちはあっても普段できないでいることをポイント獲得を理由に色々実践してみることができて、結果的にはポイント獲得の目的以上にとても楽しかったです。
- クイズなど楽しみながら参加できるものがあるとおもしろいと思う。
- リアルイベントの参加の機会がもっとあれば嬉しいです。

ACT5メンバーポイントアプリ

大丸有エリア ポイント付与ご協力店舗マップ

（2022年9月5日付 日本経済新聞掲載広告）

2022年9月以降より ポイント付与にご協力いただいた店舗

丸の内仲通り	キッチンカー 鎌倉珈琲
新有楽町ビル	ビームス プラス 有楽町
有楽町電気ビル	ビームス ゴルフ 有楽町 TexturA
新東京ビル	紫野和久傳　丸の内店
丸の内ブリックスクエア	エシレ・メゾン デュ ブール mood board
丸の内ビル	American Pharmacy 丸の内店 暗闇坂 宮下 ビームス ハウス 丸の内
新丸の内ビル	BARBARA market place 151 PASTA HOUSE AWkitchen TOKYO POINT ET LIGNE ビームス 新丸の内
丸の内永楽ビル	BISTRO DOUBLE
丸の内仲通りビル	GARB TOKYO
国際ビル	ウィッフィ
大手町パークビル	シュークリーム専門店ウルル大手町店
大手町カンファレンスセンター	バルJimmy大手町

- ACT5メンバーポイントアプリ協力店
- エコバッグ利用・ショッパー辞退
- マイボトル・マイカップ利用
- チェックインでポイント付与
- マイ箸の持参（店内のお食事、お弁当購入）
- サステナブルフード/エシカル商品の購入
- 衣類修理サービスの利用/使わなくなった衣類の回収
- eteマイジュエリーポーチ・ボックスの利用
- 空容器の回収
- ケアサービスの利用 修理サービスの利用 マザーハウス レザーバッグの回収

メディア掲載一覧

日本経済新聞 全国版 朝刊

副委員長企業の日本経済新聞社と連携し、プロジェクトへの想いや内容について全国版にて広告が掲載されました。（2022年5月、9月）

2022年5月6日付および9月5日付 日本経済新聞朝刊「日経大丸有SDGsフェス」広告企画より一部転載

web・新聞掲載等

各テーマのアクションについて、多様なメディアに掲載されました。

SUSTABLE／2022年9月水産タイムス掲載

TV

プロギングイベントやポイントアプリ等、ACT5の取り組みについて紹介されました。

BSテレビ東京「未来を創るキーパーソン ～日経SDGsフェス2022～」2022年9月11日放送（日経チャンネル、Channel JAPANでも同内容を配信）

有識者からのコメント

2023年は SDGs実施期間の中間点 目標達成へ向けて アクション実践の拡大を

国連広報センター所長
根本 かおる氏

Kaoru Nemoto　テレビ朝日を経て、1996年から2011年末まで国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）にて、アジア、アフリカなどで難民支援活動に従事。ジュネーブ本部では政策立案、民間部門からの活動資金調達のコーディネートを担当。WFP国連世界食糧計画広報官、国連UNHCR協会事務局長も歴任。フリー・ジャーナリストを経て2013年8月より現職。

大丸有SDGs ACT5において「環境」はACT2に掲げられた重要テーマであると同時に、すべてのACTの礎です。2022年には、国連広報センターが146もの日本のメディアとともに展開した気候キャンペーン「1.5℃の約束 ― いますぐ動こう、気温上昇を止めるために。」の告知動画を、大丸有地域の多くのデジタル・サイネージで1ヶ月以上にわたって流していただきました。この場をお借りして、多大なるご協力に厚く御礼申し上げます。

持続可能な開発目標（SDGs）が多くの関係者の熱意のおかげで、政府・自治体はもちろん、ビジネス・金融・地域・教育・ライフスタイルなど様々なシーンで主流化が2021年以降一気に進んだと実感していました。この関心を、私たちの生きる世界を長期にわたって大規模に揺るがす最大の脅威「気候危機」について、これに歯止めをかけるアクションのムーブメントをこの日本でも起こしたいという願いから生まれたのが、「1.5℃の約束」キャンペーンです。2022年はじめから国連本部や「SDGメディア・コンパクト」に加盟する日本のメディアとキャンペーンの立ち上げに向けて時間をかけて相談し、6月にスタートを切ることができました。SDGs ACT5実行委員会の日経新聞や日経BPも本キャンペーンに参加してくださっています。

気候変動を含む「プラネット」の課題は、SDGsの13・14・15番目の環境関連の個別目標にとどまらず、全ての17の目標を支える礎であり、地球という土台が揺らぐと、社会も、経済も成り立たなくなってしまいます。日本をはじめ世界各地を襲う豪雨や熱波、国土の3分の1が水に浸かってしまったパキスタンの大洪水など、気候危機は私たちが適応できるスピードをはるかに上回るスピードで進行し、深刻化しています。世界の国内避難民については、気候災害は今や紛争よりもはるかに多くの避難民を

生む要因です。今対策を取らなければ手遅れになり、後世に大きな禍根を残しかねません。

日本でも、2020年秋に当時の菅義偉首相が2050年までの排出量実質ゼロという日本の削減目標を表明して以来、ゼロ・エミッションや脱炭素という言葉が浸透してきてはいます。しかしながら、自らのアクションが伴う「自分事化」が十分に社会に浸透しているかというと、まだまだだと言わざるを得ません。今できるだけ早く、そして大きな規模で新しい当たり前を作っていかないと間に合わない。しかしながら今ならまだ何とか間に合う！

「1.5℃の約束」キャンペーンを行った目的は大きく2つあります。まず、世界の平均気温上昇を産業革命以前と比較して1.5℃に抑えることがなぜ必要なのか、理解を促進すること。そして、地球温暖化をはじめとする気候変動に歯止めをかけるための具体的なアクションを提示し、個人や組織に行動変容を促すこと。そのために、人々が日々接するメディアの力を最大限生かしたい。さらに、キャンペーンに参加するメディアには、企業としての自社の気候アクションの取り組みを強化することも期待しました。

6月のキャンペーンの立ち上げ以降、各国首脳や世界のリーダーたちがニューヨークに集結する第77回国連総会ハイレベルウィーク初日の2022年9月19日から、エジプトで開催の気候変動枠組条約第27回締約国会議（COP27）の予定最終日の11月18日までの2か月間をキャンペーン強化期間とし、参加メディアとともに情報発信をプッシュ。その動きの中で、約4,300事業所が集積し、約28万人が働く大丸有エリアで、100を超えるビジョンで気候キャンペーン動画を放映していただけたことは大きな後押しとなりました。たまたま通りがかった街角のサイネージでキャンペーン動画を見かけた際には、大丸有SDGs ACT5の皆様の心意気やキャンペーン参加メディアによる協力の輪に、嬉しさがこみ上げてきました。

本キャンペーンに自社のクリエイティブ・ボランティア制度を活用してご協力くださった株式会社博報堂DYホールディングスによる、キャンペーンのインパクトに関する分析では、1.5℃上昇に抑える必要性への理解と実践意欲が、キャンペーンを通じて高まり、キャンペーン情報認知者ではほぼ全員が「気候危機」に危機感を感じ、意識して行動したいと回答しています。また、より多様な形態のメディアを通じてキャンペーンに接した人ほど、「気候危機」への危機感や「気候危機」の抑制につながる行動の実践度が強くなっています。生活の中で実践できる具体的な例もまじえながら、継続的に、高い頻度で、深い内容のメディアコンテンツに触れることが、アクションの実践を拡大するためには必要だということが明確に浮かび上がる暫定結果となりました。

2023年は早くも15年間のSDGs実施期間の中間点です。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）、気候危機、ウクライナ戦争などの打撃で大きく後退を余儀なくされてしまったSDGsの進捗を、2030年までの目標達成の軌道に少しでも戻すことが必要です。2015年のSDGs採択時のようなエネルギーを再び呼び起こしていく上で、大丸有SDGs ACT5の皆様には今後もパートナーシップの力でご協力いただければ幸いです。

参加者からの声

漁業を継続させるため、「SUSTABLE」を通して現状や取り組みへの理解を

但馬漁業協同組合
参与
丸山 和彦氏

「SUSTABLE2022～未来を変えるひとくち～」
第6回『未利用魚の有効活用』へご登壇

兵庫県北部は東京都心部から離れており、地域名すらご存じない方も多くいらっしゃる中で、但馬の漁業が直面している厳しい現状を少しでも多くの方に知っていただきたいとの思いから、SUSTABLE2022の第6回目に登壇させていただきました。

仲買人は魚の見栄えや加工サイズを考えて競りで購入しますので、サイズが少し小さいだけで売れないこともあります。競りにかけられても売れない魚については、船上で選別されることなく、未利用魚として海に捨てられてしまいます。

但馬漁業協同組合では、漁業者支援を目的に、2016年から未利用魚を活用した商品開発や販促活動に向けた企画開発の取り組みを行ってきました。

最近SDGsへの取り組みが重視されてきた中で、我々の未利用魚の取り組みへの注目度もようやく高まってきたと感じています。

ただ、我々の取り組みについては、新しい挑戦を伴うものであったため、周囲の漁業関係者の賛同を得て取り組みを進めるのは一筋縄ではいきませんでしたが、そこは実績を見せればと思い取り組みました。

今回のイベントは軽食付きセミナーでしたので、恵比寿・笹岡の笹岡氏に未利用魚のメニューをお任せしましたが、「この魚がなぜ未利用なの?」との声が上がるほど、美味しく見事なメニューでした。

今回のセミナーを通じて、より多くの方が但馬の漁業の厳しい現状と漁業者の資源管理への努力を知るきっかけとなり、我々の取り組み意義を少しでも理解いただけたのかなと感じております。

但馬の漁業への課題は山積みです。底曳網漁業に限らずその他の漁法でも低利用魚の存在があります。また、日本の漁業は衰退の一途を辿っていると言っても過言ではないくらい大変な状況です。今後も、様々な企業との異業種連携により、サステナブルな取り組みを推進し、漁業者に漁業を継続してもらうべく、日々邁進していきたいと思います。

ZEISSは設立から176年のドイツのカールツァイス財団を母体とする光学ブランドです。

ZEISSの日本法人であるカールツァイスジャパンは、光学製品を通じて環境教育を含めたSTEAM教育を推進する取り組みを行っております。カールツァイスジャパンが拠点とする千代田区も皇居と大丸有エリア及びその周辺を中心として、緑と水に恵まれる実に豊かな自然を内包するエリアであります。

その生物多様性を光学製品を通して地域のステークホルダーの方々に実感してもらいたいという思いをいだいておりました。

今回、「濠プロジェクト」に参加させていただくことで、目視が難しいミクロの世界の生き物を顕微鏡を通して共有することで、研究者の方々にはさらなる深堀りを、一般参加者の方々にはその世界を純粋な驚きと興味で、それぞれの視点で環境問題へ目を向ける契機になる一助になれたことを強く実感いたしました。

都市の中の自然をレンズを通して解像度をあげて視ることによっての生物多様性の理解を深める。ZEISSがブランドアイデンティティといたしております「Seeing Beyond」を具体化できる絶好の機会とさせていただきました。

次年度以降も「Seeing Beyond」を通じて大丸有ACT5委員会の皆さま、また地域のステークホルダーの方々とともに大丸有エリアの内包する生物多様性への理解を深めることにご協力させていただければと思います。

顕微鏡でミクロの世界を共有し、様々な立場からの視点で環境問題へ目を向ける契機に

カールツァイス株式会社
サスティナビリティコーディネーター
田丸 智浩氏

参加者からの声

SDGsの背景に存在する「人」に映画を通じて出会ってもらいアクションの基盤を育む

大丸有SDGs映画祭2022アンバサダー
映画キュレーター
アーヤ 藍氏

SDGsという言葉は日本社会に広く浸透したと感じる一方で、この目標が作られた背景にある社会や世界の問題一つ一つに細かく意識を向けている人は、まだ少ないのではないかと思います。そして、その問題の渦中で生きている人の存在にまで想いを馳せている人は、さらに限られるのではないかとも思います。

一方、私たちの心が一番揺さぶられ、問題解決のために何かアクションを起こそうという気持ちが沸き起こるのは、そうした問題に直面している人と“出会い”、その人たちの想いや声に触れた時ではないでしょうか。

今年で3年目を迎えた大丸有SDGs映画祭では、そうした「出会いの場」を作ることを目標に、様々な社会問題に関わる国内外の映画作品を上映し、各領域で活動しているゲストによるトークセッションを開催してきました。

リアルな会場で映画の世界に没入して追体験し、ゲストからの生の声に触れていただくと、遠く感じられがちな世界の問題が、ぐっと自分に近くなるという声を、これまで多くいただいてきました。

特に今年は、過去2年の積み重ねもあって、ご自身がもともと関心をもっていたテーマではない回でも、参加してくれる方が増えてきたのが一番の成果として感じた点です。SDGs達成期限の2030年までカウントダウンが進んでいくなか、各領域に精通している方々のみならず、多様なバックグラウンドをもつ人たちで共に考え、アイディアを持ち寄り、社会を変えていくことが大切になるはずです。

一方で、映画祭の「映画＋トーク」の時間だけでは、受動的なインプットに限られてしまいます。そこから能動的なアクションに踏み出してもらうため、次年度以降は他のACTグループとも連携して、「知る」から「行動する」までの道筋をACT5のなかでももっと育んでいければと考えております。ぜひ皆様のお力をお貸しいただければ幸いです。

人事部として知識を増やし、生きづらさを感じる方が減る世の中を目指して

株式会社システムサポート
人事部
野村 郁氏

写真左が野村氏

企業の人事部に所属しているためD＆Iを推進していく立場にいるのですが、これからどのように取り組んでいこうかと悩んでいた際に、ACT5のD＆Iの企画でモデレーターをされている堀川さんをご紹介いただく機会があり、今後のために役立つ情報や知識が得られるのではと、大丸有エリアの企業ではないのですが参加させていただくようになりました。「E＆Jラボ」はE＆Jの概念でもある「Enjoy＆Join、誰もが楽しみながらD＆Iについて取り組む」のとおり、毎回楽しみながら学ぶことができています。

ラボでは障がいのある方やLGBTQ当事者の方のお話を伺う機会も多く、自分の知らないところで生きづらさやつらい思いをされている方がたくさんいらっしゃるということや、そういった生きづらさを抱える人が少しでも減る世の中にしていきたいと活動されている方がいらっしゃることを知りました。

LGBTQ当事者の方が実際に今まで経験してきたお話などを聞き、「誰も傷つかない世界にしたい」という強い思いも深く共感しましたし、2022年12月のE＆Jラボでは俳優の東ちづるさんが“まぜこぜの社会”を目指されているということにも大変感銘をうけ、その実現に向けて自分自身にできることを改めて探してみようとも思えました。また、このE＆Jラボを通して、企業の壁をこえて同じ思いの仲間が増えたことも参加して良かったと思えた点です。

今後はラボに参加し、自分が感じたこと、学んだことを社内に持ち帰り、一人でも多くの人に伝え仲間を増やしていくこと、そして個人としてできること、企業としてできること見つけていき、一歩ずつでも一人一人が行動していくことが、誰かの笑顔につながり、誰も傷つかないまぜこぜの世の中の実現につながるのではと思っています。

最後に、このような貴重な学びと出会いの機会を与えてくださり、毎回あたたかく迎えてくださるACT5実行委員会の方に感謝します。今後ともよろしくお願いいたします。

総括と次年度に向けて

大丸有SDGs ACT5実行委員会

井上 成　運営委員長
見立坂 大輔　事務局長
原 陽佑　事務局次長

横展開・掛け算で活動が広がった一年
立ち上げ期の3年を終え、次の3年は社会実装を意識し より柔軟に、自由な発想でACT5を加速する

2022年度で3年の活動を終えたACT5。昨年までおぼろげに見えてきた連携がより明確になり、活動は明らかに横に大きく広がり、いきいきと動き始めた。まさにACT5は自律的なアクションに成長しつつある。2030年までの10年を考えると「立ち上げ期」の締めくくりとなった一年を振り返り、来年度の活動を期する。

井上　昨年度までのACT5で、テーマごとの縦の深掘りができたので、今年は「横展開」「掛け合わせ」に力を入れるという方向性が決められて、その点、活動に非常に広がりが出た一年でしたね。

見立坂　例えばジョギングとごみ拾いをミックスした「プロギング」は、ACT2の環境と、ACT3の健康、ウェルビーイングをかけ合わせたイベントでした。「SUSTABLE」の多くの企画も、環境問題、コミュニケーションといった複数のテーマに係ることを意識して実施しました。また、大丸有の企業の皆さんが「自分たちも活動に参加したい。」「一緒に企画したい。」と持ちかけてきてくれたのも今年の大きな特徴です。今年度から実行委員会に加わった東京国際フォーラムさん、濠プロやプロギングに参加下さったカールツァイスさんなど、積極的に集ってくれた企業がありました。「企画実施者であり参加者」という企業が増えると、ACT5がもっと盛り上がりますよね。

井上　東京国際フォーラムで上演した、大丸有のワーカーが出演者として参加したパフォーマンス『今ここから、あなたのことが見える／見えない』は人生の多様性や来し方を振り返ることで出演者も観劇者も勇気をもらえた作品になったのではないでしょうか。ACT5の今後の活動の広がりのきっかけとなるアクションとなった印象があります。

原　私は、映画祭やSUSTABLEが、非常に洗練されてきたという印象があります。参加者が当日のイベントに参加するだけでなく、次のアクションにつなげる土壌も育ってきたと感じています。今後、関係する地方のプレイヤーも巻き込みながら、実際に社会課題を抱える生産現場を訪問するといった活動も始めたいですね。

井上　地方との連携は進んできていますよね。下田市では高校生を対象とするプロジェクトの実施を検討中です。ブリッジ人材、行政の参画など、連携に必要な要素も見えてきて、来年度に向けてイメージが構築できそうです。大丸有のワーカーが地域の関係人口になって、ワーカーおよび関係する地域の双方がWELL-BEINGになるのが理想です。

見立坂　地方への横展開とともに、これらのACTが年度ごとに終了するものではなく、来年度の活動に向けた繋がりを感じさせる、連結的な役割をもった企画も現在進行形で開催されていることも今年の大きな特徴ではないでしょうか。ACT4「ダイバーシティ&インクルージョン（D&I）」は、D&Iを一歩進めてエンジョイ&ジョイン（E&J）で進めるコミュニティ「E&Jラボ」を、冬から春にかけて展開し、活動を広げました。D&Iに取り組みたい企業、当事者やこの課題に関心のある個人が揃ったこの活動を通じて、コミュニティの萌芽が生まれてきており、情報交流が定着しつつあります。

井上　日本は「ESG」のうち「S＝Society」の活動が出遅れているので、課題意識をもった個人を企業が応援する仕組みを提案するなどして「S」を加速していけたらいいですよね。その観点から「S」は『人材教育』が重要なテーマです。それは将来世代への教育も同じで、Minecraftカップを昨年同様応援したのも、教育の新しい姿を模索することが社会課題の一つと捉えるからです。

また、少し視点は変わりますが、Minecraftカップでは東京都が参画し、東伊豆町では町長と長時間対話をしました。ACT5が政策提言を行う等、広く社会にメッセージを出すことはやるべきことの一つです。行政との関係強化はこれからの課題ではないかと思います。

原　来年度は、社会課題に対する認識を共有できる行政とも提携しながら、より具体的で地域色のある活動を展開したいですね。サステナビリティを考えるうえで、各地域は様々に課題を抱えています。私たちJAグループが持つ地方のリソースも活用して、食の持続性に課題を抱えている農業を軸にした関係人口の創出、サステナブルな食べ物の販路開拓など、ACT5からたくさんの活動がローンチできそうな期待を感じています。

井上　そうなんですよね。我々が「ACT5」つまり「Action」という言葉にこだわっているのはそこで、「知りました、分かりました」だけではなく、アクションが必要なんです。2030年までの10年スパンで考えると、最初の3年が頭のトレーニングも含めた立ち上げ期だとすると、次の3年は、社会実装を意識して、体験型のプログラムを増やすなど具体的なプロジェクトを立ち上げていかないといけません。

見立坂　ACT5をショーケース化、プラットフォーム化し、モデルケースの創出を行いたいです。E&Jのように、人が人を呼ぶような波及力が生まれるとブレイクスルーしていきます。SDGsを語る際、我々の世代は「気候変動を止められる最後の世代」であり、同時にLGBTQに象徴される「差別を解消できる最初の世代」となれる可能性があるともいわれます。ACT5はその起点になれるのではないでしょうか。

井上　やはりACT5が目指すのは、「人の考え方」、「人の行動」を変えることだと思います。少子高齢化はモノが売れなくなるので、GDP追求の時代からパラダイムを転換すべきタイミングに来ているのではないでしょうか。先程の「S」の強化ではないですが、ACT5としての活動は勿論のこと、社会課題に取り組む起業家を支援するといった活動もこの先あり得ると思います。「ACT5」の活動は、固定せずに生き物のように、柔軟に発展させていきたいですね。

アクション一覧

ACT 1	アクション 1-1	ロスフラワープレゼントキャンペーン
	アクション 1-2	SUSTABLE2022～未来を変えるひとくち～ SUSTABLE2022①古来種野菜の世界　SUSTABLE2022④アグロフォレストリー SUSTABLE2022②海を再生する海上養殖　SUSTABLE2022⑤サステナブルな日本ワイン SUSTABLE2022③未来を支える陸上養殖　SUSTABLE2022⑥未利用魚の有効活用
	アクション 1-3	サステナブルフードACT5ポイント連携
	アクション 1-4	食べて応援SDGs！秋の国産ジビエフェア
ACT 2	アクション 2-1	【大手町、丸の内、有楽町で働く方限定】皇居外苑濠での泥と生きもの採取 ～濠プロジェクト～
	アクション 2-2	【オンライン】丸の内で働く大人の学び直し 皇居のお濠と生物多様性ゼミ
	アクション 2-3	マイボトル・マイカップ利用促進プロジェクト
	アクション 2-4	レジ袋・ショッパー辞退促進プロジェクト
	アクション 2-5	レジ袋・ショッパーから資源節約に貢献！ドラッグストアで取り組むSDGs
	アクション 2-6	お気に入りのジュエリーポーチ・ボックスで、限りある資源を大切にしよう
	アクション 2-7	マイ箸・容器の持参と、おいしいランチでサスティナブルに貢献しよう
	アクション 2-8	使わなくなった衣類の回収　ゴールドウイングループの服のリサイクル活動「GREEN CYCLE」
	アクション 2-9	新品エコバッグの循環プロジェクト
	アクション 2-10	衣類を大事に使い続けよう。パタゴニア衣類修理サービス
	アクション 2-11	衣類を大事に使い続けよう。ゴールドウイングループのリペアサービス
	アクション 2-12	諸般の事情により中止
	アクション 2-13	大丸有から地方の農家とつながろう。 農家と連携し生ごみの循環を模索するコミュニティプログラム「CSA LOOP」
	アクション 2-14	マイお箸を持って、常盤橋タワーの“みそスープBAR”に行こう！！
	アクション 2-15	丸の内 gramme Marché（グラムマルシェ）2022
	アクション 2-16	大丸有シゼンノコバン　2022　夏
	アクション 2-17	丸の内 de 打ち水

アクション一覧

	アクション 2-18	～おいしい未来へ やまなし～ 夏のすもも・ももフェア
	アクション 2-19	鞄類を大事に使い続けよう。ゼロハリバートンのリペアサービス
	アクション 2-20	鞄類のケア・修理・回収　マザーハウスのトータルサービス「ソーシャルビンテージ」
	アクション 2-21	資源を大切にしよう。ニールズヤード レメディーズの空き容器回収
	アクション 2-22	資源を大切にしよう。コスメキッチンの空き容器回収「リサイクルキッチン」プログラム
	アクション 2-23	宮古島サステナビリティツアー
	アクション 2-24	「捨てる」を「贈る」へ 「RE;POST」衣類回収活動
	アクション 2-25	GOOD DESIGN Marunouchi企画展「サーキュラーシティ丸の内 ゴミ＝資源 循環のデザイン」に行こう！
	アクション 2-26	ショッパーから資源節約に貢献！ビームスで取り組むSDGs
	アクション 2-27	海を守る！「ブルーカーボン」を学ぶセミナー
	アクション 2-28	AMERICAN PHARMACY 丸の内店でのフェムテック商品購入でACT5メンバーポイントを差し上げます。
	アクション 2-29	【リアル×オンラインセミナー】美しい森林を守るために私たちができることを考える
	アクション 2-30	ブルーカーボンを学ぶ「アマモ場 現地見学会」
	アクション 2-31	【リアル×オンラインセミナー】新技術で社会課題解決の道へ突き進む！ “バイオ素材の開発、普及”に挑む起業家に学ぶ！
	アクション 2-32	【リアル×オンライン】軽食付イベント／沖縄×サーキュラーエコノミーについて考えよう
ACT 3	アクション 3-1	丸の内ラジオ体操
	アクション 3-2	丸の内/仲通り周辺でのプロギング（ごみ拾い×ジョギング）
	アクション 3-3	大丸有バスあいのり×フェアトレードマルシェ
	アクション 3-4	Will Conscious Marunouchi 2022 まるのうち保健室
	アクション 3-5	パフォーマンス『今ここから、あなたのことが見える／見えない』
	アクション 3-6	チャリティウォーキングチャレンジ
	アクション 3-7	【オンラインセミナー】MY PINK ACTION 知ろう、自分と乳がんのこと。
	アクション 3-8	【大丸有×伊豆下田】地域の社会課題をともに考えるワークショップ

アクション一覧

	アクション 3-9	はじめの一歩を応援します～会社で働きながらできる社会貢献とは～
	アクション 3-10	多摩草むらの会／精神障がい者就労支援の現場訪問
	アクション 3-11	タイの山奥で少数民族の子どもたちのために学校を運営している日本人の話
	アクション 3-12	「見えない壁だって、超えられる。」障がい者クライミングの世界を体感する
	アクション 3-13	東京おもちゃ美術館／館内ツアー＆ボランティア体験
	アクション 3-14	ＪＲ新宿駅周辺の路上生活の方々の訪問ボランティア
	アクション 3-15	障がい児とのサーフィンを通じた共生社会づくり
	アクション 3-16	行動を起こそう！社会課題を自分ごと化する方法
	アクション 3-17	Minecraftカップ2022全国大会
ACT 4	アクション 4-1	レインボージャックイベント
	アクション 4-2	丸の内 Shall Weコンサート
	アクション 4-3	キラキラっとアートコンクール マルキューブ審査会 ＆ 農福連携マルシェ
	アクション 4-4	大丸有のD&Iをかんがえるカイギ
	アクション 4-5	【E&Jラボ】D&Iを楽しく学ぶコミュニティ「〇〇さん、あえてここから聞かせて！」
	アクション 4-6	【E&J】人事・D&I 推進担当者のためのD&I研究コミュニティ
ACT 5	アクション 5-1	SDGsランク日本1位の北海道大学によるSDGs学び直しセミナー
	アクション 5-2	ACT5情報発信拠点へのチェックイン
	アクション 5-3	大丸有SDGs映画祭2022 映画祭①ソニータ 映画祭②たねと私の旅 映画祭③グレイテスト・ショーマン 映画祭④ゴースト・フリート 知られざるシーフード産業の闇 映画祭⑤ゲイビー・ベイビー 映画祭⑥グッド・ライ ～いちばん優しい嘘～ 映画祭⑦コペンハーゲンに山を 映画祭⑧グランド・ジャーニー 映画祭⑨蹴る 映画祭⑩コーダ あいのうた
	アクション 5-4	東京ビエンナーレ2023 はじまり展 第2弾「Slow Art Collective Tokyo」

大丸有SDGs ACT5実行委員会

三菱地所
農林中央金庫 NORINCHUKIN
NIKKEI
日経BP
大手町・丸の内・有楽町地区 まちづくり協議会
Ligare 大丸有エリアマネジメント協会 OMY Area Management Association
ECOZZERIA
街と歩む、街を支える。 丸の内熱供給株式会社
MRI 三菱総合研究所
TOKYO INTERNATIONAL FORUM 東京国際フォーラム

協力パートナー（五十音順）

アカルク
ECOMMIT 地球にコミットする循環商社
エコ結び
ÉCHIRÉ depuis 1894 MAISON DU BEURRE
ESTNATION
ete bijoux
Orion 人を、場を、世界を、笑顔に。
good mornings
Kuradashi
Green Earth Institute
Co En Corporation
JAPAN FOR UNHCR 難民を守る。難民を支える。 国連UNHCR協会
KOBE KITANO HOTEI
Kayou Rentia Creative Rental Company
Goldwin
CosmeKitchen BEAUTY
COSMETICS AND MEDICAL
Sustaina Station DaiDai
THE NORTH FACE
3×3 Lab Future
SUNTORY
SHAPLANEER
JAおきなわ
Startline
STARBUCKS
Story inc.
ZERO HALLIBURTON
但馬漁業協同組合 Tajima Fisheries Cooperatives
TULLY'S COFFEE
東京チェンソーズ
TOKYO BIENNALE 東京ビエンナーレ
TUMI
ZEISS
Tomod's
NEAL'S YARD REMEDIES
NINO
NACS-J 日本自然保護協会
Harch
Biomass Resin HOLDINGS
patagonia
BEAMS
FFM FISH FARM MIRAI
4NATURE
Florence 認定NPO法人フローレンス
北海道大学 HOKKAIDO UNIVERSITY
My Shokudo Hall&Kitchen
Marunouchi Happ. Stand & Gallery
MARUNOUCHI HOTEL 丸ノ内ホテル
三菱地所プロパティマネジメント
MSEN MIYAKO ISLANDS SEA ENVIRONMENTAL NETWORK 特定非営利活動(NPO)法人 宮古島 海の環境ネットワーク
紫野 和久傳
UNHCR The UN Refugee Agency
子どもの貧困に、本質的解決を。 Learning for All
LA MAISON DU CHOCOLAT PARIS

後援：国連広報センター

制作： 大丸有SDGs ACT5実行委員会 https://act-5.jp/ 2023年2月発行